心をひとつに

堅中学校三年一組
岸本芹菜

「基地問題」と聞いて、みなさんは何を思い浮かべますか。以前の私は、「基地問題」にあまり関心を持っていませんでした。どうしておとな達が基地に反対しているのかよく分かりませんでした。しかし、この一年間で体験した戦争に関しての三つの経験がきっかけで、基地問題について考えるようになりました。

一

一つ目は、修学旅行で長崎の原爆資料館に行って原爆について学んだことです。始めは、京都と奈良に落とす予定だった原爆が急きょ変更になり、広島と長崎に投下されたのです。原爆によって多くの罪のない人々が亡くなり、横たわるたくさんの死体を見ても何も感じず、ただ水をもとめて歩き回る人々。しかも、戦後六十七年間、原爆の後遺症を背負って生きている人がたくさんいたのです。私は、原爆資料館で見た被爆した人々の残酷な写真が今で

も忘れられません。

二つ目は、五月に琉球新報の取材で戦争当時、シムワがマにいた知花治雄さんの話を聞きに行ったことです。知花さんの祖父であるハワイ帰りの比嘉平三さんがアメリカ兵と交渉したおかげで、シムワがマにいた千名あまりの人々は投降し、助かったそうです。しかし、シムワがマとあまり離れていないチビチリがマの人々は、戦後シムワがマでは、多くの人が命を失ったので平三さんからは、戦後シムワがマの話は絶対する

なと口止めされたそうです。

三つ目は、六月に学校の平和学習で地域がイドの比嘉涼子さんのお話をチビチリがマで聞いたことです。「アメリカーの捕虜になることは、とても恥ずかしいことだから、アメリカーに捕まるぐらいなら自決しろ」という間違った教えのせいで死んでいったチビチリがマの人々。自分の親、子ども、兄弟を自分の手で殺すのがどれほど辛かったことか……。

想像すら出来ません。戦前の軍事教育の悲惨

さを学んだ日でした。

そして、現在問題となっている普天間基地。県民が政府や防衛省にいくら意見を述べても全然聞いてくれません。

「基地問題を解決する。沖縄県民に配慮する。」と言いながら、結局、

「沖縄県民には申し訳ないが……。」

となる政治家たち。いったい、これから沖縄はどうなるのでしょうか。基地問題は、何も解決しないのでしょうか。

二

六十七年前、太平洋戦争の時に日本軍に見捨てられた沖縄。今も日本政府は、基地問題において沖縄を見捨てようとしているのではないかと私は思います。毎日、戦闘機が飛ぶ空の下で、生活したことのない彼らに沖縄県民の辛さや恐怖は理解出来ないのです。ましてや、唯一の地上戦の体験をした身内のつらさなど想像できないでしょう。

戦争という過去は変えられないけど、未来は自分の行動次第で変えることが出来る。私

は将来、音楽関係の仕事に就きたいと思って
います。音楽は、琉球王国時代、戦を嫌い、
歓待するためのもの。そして、戦後間もない
頃、アメリカ軍のパラシュートのヒモとクッ
キーのカンカンで作ったカンカラ三線は、人
々の心を慰めたと聞いています。ふと考える
と、音楽と心の「平和」は繋がるかもしれま
せん。また、「音楽に国境はない」とよく言
われます。英語と同じ、万国共通の言葉でも
あるのです。近い将来、「音楽」を通して、
「平和」を訴えることの出来る人・「平和」
を実現できる社会の担い手になりたいです。